潮みちるまで　280円

昭和35年11月25日初版発行

著　者　大原富枝

発行者　津曲篤子

印刷者　橋本伝四郎

発行所　株式会社　彌生書房

東京都新宿区市谷甲良町29
電話(341)7534

検印省略

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

装幀

いわさき・ちひろ

舟、かえる 6
潮の愁い 18
生きる場所 33
障碍 52
特別学級 83
混乱の中で 99
コーラスの日の出来事 154
ひそかな分析 191
再び春がきて 211

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

潮みちるまで

舟、かえる

三、四日ひどく風の冷たい日がつづいて、窓ガラスが部屋の中の子供たちに負けないほどうるさく大騒ぎしていた。

今日はその風が落ちてしまって、ガラス戸越しに眺める裏山に暖かい日ざしが煙るように降っている。

まだ熟しきってはいないが、黄色く色づいた夏みかんの枝がたわわに垂れて、裏山全体は紫色っぽく、柔らかな表情をしている。

早春という言葉が、自然に早苗の口に浮んできた。

しかし、彼女のいる部屋の中はいつものように、ある種の喧噪に充ちていた。それはたくさんの角のある石っころを、一つの大きな籠の中に入れてあるような絶えず小さいぶつかりあいがあっちこっちで起っている、といったふうなものであった。

ここに集まっている十人の子供たちは、全く鋭角的な角をもつ石っころのように、一人一人が

みんな小さい危険を抱いていた。
その小さい危険がぶつかり合うと、思いがけない椿事を惹き起すのだ。まるで油断はならない、絶えず注意をしていなければならなかった。
そのために、彼女には四つも六つもの眼が必要だ。だから早苗は、背中にも脇にも眼をくっつけているような心地だった。
「きよちゃん、その何か棒をもってるのは誰なの？」
「これかあ、これ先生よ」
三脚を立てて、パレットを持って、せっせと絵の具を塗っている少年の後に立って、その稚い絵を眺めながらも、早苗は、後の二年生の正茂が険しい眼でナイフをもっているのを意識していた。
「ふーん、先生か、先生はどうしているの？」
「先生か、先生、怒っちょるけんの」
「まア、そうねえ、大きな眼え剝いて怒っちょるわ」
笑いながら、早苗は、その絵の中の自分を眺めた。意識は全部背の方に回って、正茂と、同じ机に並んでいる弘との間が険悪さを増してゆくのをじっとうかがっているのだ。
「これ、モノサシよ、先生、モノサシでぶつよって、怒った——」

「ふふふ、清ちゃん、よう覚えちょるわね」
たった一度、早苗がほんとうにモノサシを持って、子供たちを睨みつけて怒ったことがある。
清盛はそれを憶えていたのだ。
やっぱりほんとうに怒ったときのことは、子供たちも憶えているのだ、と早苗は胸に小さく痛みを感じた。
記憶の悪いこの子供たちなのに——
彼女の笑った声に、正茂と弘はいさかうのを止めてこっちに気をとられた。そして、そのいさかいは、どうやらそのまま納まったようである。
早苗はホッとし、正茂の狂暴性もいくぶん柔らいだ。少くともスピードがおちてきた、というふうに観察していた。去年だったら、もう彼はアッと思うまに弘の手を傷つけていたものだ。
彼女が正茂の机の方にくるりと向き直ると、彼は眼尻の切れ上った細い眼でキラリと光るように彼女を見た。
その眼はやはり普通の眼ではなく、彼の体を流れる血の不幸を早苗に感じさせた。その不幸さは、清盛とか正茂とかいう歴史の中の人物の名前を、無造作につけられている彼等の出生とも関係があるのだった。
彼等の親たちはほとんど字が読めなかったのだ。彼等は子供たちにこんな名前をつけた。

早苗はふと、教室のガラス窓の上から、一人の男の顔がのぞいているのに気がついた。
「あ、――」
早苗は口の中で小さくさけんで、
「清ちゃん、清ちゃんとこの舟、もどったらしいわね」
と静かにいった。
お父さんが、ほら見えたよ、などというと、教室の中には、収拾のつかない混乱が起るかも知れない。
この知能指数の普通でない子供たちには、いつでも一種の調和のとれた雰囲気をあたえておかなければならない、ということを、早苗は考えている。
彼等の弱い、あるいは混濁した血をもつ頭脳には、突然な、または強烈な刺戟はよくないのだ。
清盛は絵から顔をあげ、早苗の顔をぼんやりと見た。
「お父さんがねえ、清ちゃんの勉強を見にこられたようよ」
早苗はそういい、
「福ちゃんとこの舟も明日、もどるんだったねえ――」
別の子供たちにも忘れずにそういってやるのだ。一人の子供にだけ注意を集中させることもここでは禁物だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

正茂はそういうとき、キラキラ眼を光らせてナイフを床に突き立てたりした。
「清盛くんのお父さん、おかえりなさい」
早苗がガラス戸をあけると、清盛の父は首から真新しいタオルをはずし、頭を下げた。
「子供が、えらい、お世話になりやして……」
ぼそぼそと口の中でつぶやいて、部屋の中にはいってきた。
彼の皮膚は全く見事に潮に焼けていた。人間の皮膚とは異なった物質、たとえば陶器かなにかのように見える。
清盛はパレットを持ったまま、とぶように父親に駈け寄ると、
「父ちゃん、銭くれえ——」
といきなりいった。
「なにをぬかす、この子は……」
父親の方もむきになって怒鳴りつけた。
「清ちゃん、あんた、絵をお父さんに見て貰うんじゃないの、ほら、お父さん、清ちゃんの絵、見てやって下さい、上手になったんですよ」
早苗は急いで親子の注意を絵の方にもってゆこうとした。
女の子たちは、

「いやア、銭くれじゃとう――」
清盛を笑い、清盛は
「なにイ――」
と女の子たちを睨み、教室の中は混乱が起りそうであった。
「みんな静かにしてエ」
早苗は大声をだしていい、
「お父さん、清盛くんの絵を見てやって下さい、ほら、おもしろいでしょう」
と父親を三脚のところにつれていった。
「これが私だそうです。皆があんまり騒ぐので、一度私が怒りました。そのときの絵だそうですよ」
清盛の絵には、前面に丸い眼をして両手と両足を拡げ、両手の間には一本の棒をわたしてある、縫いぐるみ人形のような人物が描かれ、その後方には、もっと小さく、まるでテルテル坊主のような頭が五つ六つ一つならべに並んでいる。
六年生の子供の描いたものとはどうしても受取れない。せいぜい三年生ぐらいの幼なさの稚拙な絵であった。
しかし、清盛にとってこれはせいいっぱいの絵であったし、彼にとって絵を描くことは憂鬱な

勉強の中でのただ一つの救いであり、たのしみだった。そのことを早苗はよく知っているので、半年ぶりに帰ってきた父親に、その絵をほめてやって貰いたいと思ったのだ。

清盛の父は息子の三脚の前に近づいたが、ちらっと絵を眺めただけで苦りきった顔になり、

「こんな、役にも立たんデコ（人形）ばっかりかいとって——」

と息子を睨みつけた。

「字いは、ちっともおぼえよらん」

早苗は父親の見幕におどろいて、あわてていった。

「いいえ、清盛くん、字も大分おぼえましたよ——」

清盛はショボンとなってうつむいてパレットをいじっている。上眼づかいで父をうかがった。

彼が父母の舟の帰ってくるのをどんなに待ちわびていたか、を思い出だした早苗は、彼が可哀想になった。

彼は先日父母にあてて手紙をかいた。

「おとうさん、おかあさん、げんきですか、ぼくもげんきで、べんきょしています。しょがつ（正月）にもんたら（帰ったら）えのぐこうてください」

この最低限度彼の意志を伝える手紙は、彼の預けられている「海の家」の寮母さんの手で上書きされたうすっぺらなハトロン封筒におさめられて投函した。

宛名は「下関市××漁業組合気付」となっていた。

彼はそのことを舌足らずな作文に書いたので、早苗は知っていた。

清盛の父親や母親や、幼ない弟妹たちは、小さい舟にのって、一年中海で暮らしている。陸には家を持たないのだ。

小さい舟には頼母子講を落してやっと買った焼玉エンジンが据えられていて、舟底には獲物の魚を生かしておく生簀や、餌や網や一本釣りの縄を入れておくところもあり、その狭い舟の中には最少限度の生活必需品が一応揃っていた。

小さい子供たちは海にも落ちないでその狭い舟の中で遊んだし、母親は食事の支度をした。海水で麦飯を炊くのだ。

彼等は一年中、魚のいる場所を追って、遠く朝鮮海峡の方まで漁にでかける。ゆく先々の漁業組合に魚を買いとられ、生活必需品を買ってくらす。

故郷の海の町に帰ってくるのは、盆と正月くらいのものであった。そしていまは旧正月があさってに迫っているのだ。

清盛の家ばかりではない、芳武の家も、まさ子や、きくよやまつ子の家の人々もみんなそうなのだ。

早苗の受持っている特別学級の生徒のうち七人は舟の家の子供たちだった。今日明日のうちに、

岡野正茂の父の舟も、岡上福年の家の舟も芳武の父母の舟も、頭鶴喜の舟もみんな帰ってくるのだ。そうして防波堤の中はこれらの舟で埋まってしまう。

清盛の父親は、漁師たちの中では息子の教育に熱心だった。

舟がはいるといつも真先に学校にやってくる。そうしてガラス戸ごしにおずおずと息子の教室をのぞいているのだ。

——あの子は漁師にはさせんけんの、

そう考えるとき、彼は思わず体に力を入れているのだった。

——字いを、ようおぼえさせて造船所へ勤めさせるぞ、月給とりじゃ、

と考えている。

彼はこの息子にせつないほど望みをかけていた。

ここ数年、彼等の海は、漁が少くなる一方だ。以前には鯛でもちぬでもたこでも、また貝でも、全く無尽蔵のように獲れたものだ。二十八年の暮には、一晩で百万円を稼いだ鯛網もあった。

しかしこのところ漁はめっきり減ってしまった。漁師たちはもう海に望みがもてなくなっている。

たくさんの島々を浮かべ、風光明媚、気候温暖なこの海は、周りをとり巻く陸地が繁栄するにつれて衰えていった。

たくさんの工場の汚水や住宅の下水が、いろいろの有毒な薬液やガスを含んで海の水を汚してしまう。

小さい、生まれたての可愛い貝の子たちは、こんな汚水やガスを吸ってアップアップ呼吸困難になって死んでしまった。

魚たちは顔をしかめて水のきれいな外海へ外海へと逃げていってしまった。

昔は近くの海だけで結構漁があって、陸に家はなくても、故郷の町の波止場で夜は舟をもやって眠ることができた。子供たちも舟から学校へ通うこともできた。

いまは遠い下関や九州、朝鮮海峡の方までかけていっても、昔のようには魚が漁れない。

海のギャングといわれる小型底曳が、小さい魚の子供までさらっていってしまう。彼等が子供のころから仕込まれて巧みにあやつる一本釣り漁では、なかなか漁れなくなってしまった。

もう漁師では食ってゆけん、というふうに皆は考えはじめた。しかし、舟を造り直したり、エンジンの頼母子など、たくさんの借金を背負っているので、それに彼等にできることといったら、やっぱりたこや魚を釣ることか、また貝をとることしかなかった。

だから、やはり彼等は毎日海にでていった。けれど、春霞のたなびいている陸の方を眺めて、子供には陸でできる仕事を仕込まなければならない、と肝に銘じているのだった。

自分の名前さえ書くことのできない彼等は、子供が字をおぼえて島の造船所に勤めるようにな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com